

1 ほのぼのとした一日 (『身辺論』)

①巣ごもり生活で、ご多分に漏れず宅配便に頼むことが増えた。食料品や水も頼んでいる。弱アルカリ性の健康水（500m l）と、ミネラルウォーター（2l）の2種類を飲み分けている。

②ミネラルウォーターは重い。ボトル12本入りのカートンを1度に5個ほど頼んでいる。商品は玄関先におくのが会社の規則だという。本当なら家の中まで運んでもらいたい、コロナのせいで規則の縛りが厳しくなった。数年前には、ゆっくりと世間話もできたが、いまはご法度。なんとも世知辛い世の中である。

この調子ではやがて、担当者の一挙手一投足^{いっきもしゅいつとうそく}さえ規則で縛ることになるだろう。

③玄関先におかれて行っても、本当に困る。この年になると、奥までカートンを運ぶのは危ない。重いものを持ち上げると、筋を痛めるし、ぎっくり腰になる。

玄関を塞ぐので、出入りの邪魔だし、見栄えも悪いが仕方がない。やむなく、必要なたびに玄関からボトルを1〜2本ずつ台所まで運んでいた。

④話はそれるが、日本人は瑣末主義者である。細々としたことまで規則で縛るのを、よいことだと思っている。島国の濃厚な空気の中で育ったから、それが当たり前で自由な空気を吸ったことがない。

しゃくし定規に規則を守り、現実を見ない人は木偶^{でくのぼう}の坊である。彼らは自分では考えているつもりだが、規則の操り人形に過ぎない。

⑤今年になって、下請けの若い男性が配達するようになった。コロナで宅急便の需要が増えて、人手が足りなくなったとのこと。生鮮食料品や代引きの商品の宅配は社員が行うが、水のように重くて保存の効く商品は、下請けに任せているらしい。

今どきまれに見る、元気で明るい人物である。年は30代後半。

⑥ある日、以前彼が配達したカートンが玄関先に山積みになっているので、見るに見かねたらしい。

ちょっと片付けますね。

そういつて、玄関の奥のスペースまでカートンを運び、手際よく積み直してくれた。これで入り口を塞ぐことはなくなった。

⑦なかなかできることではない。下手をすると規則違反だし、時間もかかる。おそらく、下請けは「1個あたりいくら」の出来高制が原則。収入は宅配個数に連動するだろうから、1個でも多く配達したいと、思うのが人情。時間に追われて当たり前である。

⑧妻は恐縮して何度もお礼を述べたそう。

彼の返事はごく自然体だった。

いつも注文してもらえるだけで、ありがたいです。下請けにとっては、仕事があることが1番です。

なかなかいえる^{せりふ}台詞ではない。

⑨妻は感心して、早速わたしに報告に及んだ。

過疎地だから、この辺の仕事口は少ない。就職氷河期の世代のようだから、格差社会を生き抜くのに大変だろう。しかし、彼は過酷な現実から、謙虚という美德をおのずと身に付けたのだ。残念だが、わたしが生きてきたビジネス世界では、こういうタイプは絶滅危惧種である。

⑩若い時にこれだけ仕事に真剣に向き合っていれば、世間を渡るには十分である。

どんなに人生に浮き沈みがあっても、最後にものをいうのは人柄である。たとえ仕事ができても、人柄に曇りのある者は信頼するに足りない。こういう輩は災いのタネを蒔く。わたしは長いビジネス経験からそうと知った。

⑪田舎のよいところは、時の流れがゆっくりとしていること。都会ではなかなか見られない、素朴で人柄のよい人たちに出会う。

彼のおかげで、わたしたち夫婦は、今日はほのぼのとした1日だった。

2 穏やかな一日 (『身辺論』)

① ここ数日うっとうしい雨の日が続いた。今日も小雨の予報だったが、さいわい外れて、朝日がベッドまで差し込んできた。カーテン越しに陽の光が燦々と弾け、気持ちのよい朝であ

る。リスが、コナラの大木を上から下まで何度も往復している。何をしているのだろう？

②コナラの緑葉が、朝の光に輝いている。一陣の風が吹くと、葉をいっぱいつけた小枝がしなる。風の強さに応じて、時に大きく、時に小さく揺れる。そのたびに葉に日の光が弾ける。まるでモーツァルトを聞いているよう。

情報端末には、好みの曲を 20 曲ほど落としている。早速、寝床の中で朝の音楽を聞く。

③まずはモーツァルトのホルン協奏曲第一番ニ長調。交通情の BGM として聞きなれた音楽だが、曲名を知ったのは、若い友人 S 君のおかげである。駿河湾から知多半島にかけて釣行する時、彼は車でいつもこの曲をかけていた。

彼は歌謡曲派だったので、意外な側面に驚いているうち、いつか耳タコになってしまった。軽快なリズムが朝にうってつけである。

④次にモーツァルトのピアノ・ソナタ第 16 と第 17 番を聞く。

これは以前、妻がピアノを弾いているのを聞いてハマった。

色々な人の演奏を試したが、仲道郁代さんに行き着いた。日の光を浴びながら、ベッドの中で、彼女の清澄なピアノ演奏に耳を傾けるのは至福の時である。

⑤たまにビバルディの『四季』や『調和の靈感』も聞く。『四季』を知ったのは、確か、加山雄三さん主演のアクション映画『薔薇の標的』で使われていたからである。その後しばらく熱中したが、最近は滅多に聞かない。

こうしてクラシックに 30 分も浸ると、しだいに気分が満ちてきて、やっとベッドを離れる気になる。これがわたしの理想的な朝の儀式である。

⑥朝食は妻と 2 人。年をとって、妻よりわたしの方が饒舌になったが、この年では食べながら話をするとなんか誤嚥のリスクが高い。そういえば、森のはずれのカレー屋さんのご主人が、誤嚥性肺炎で亡くなったのは、2 ヶ月前のことである。

だから、食事も BGM をかけながら、ポツリポツリと話しながら食べる。静食である。

⑦食事中も、仕事中も、いつも BGM をかけっぱなしである。モーツァルトなら一日中かけていても飽きない。わたしには偏執癖がある。人は心臓が鼓動し、血が流れても意識しないのと同様、全く気にならない。

同じ曲をくり返しくり返しかけるのは、妻には迷惑だろうが、とっくの昔に諦めているらしい。

⑧わたしは雑食性である。クラシックの好みに一貫性はない。行き当たりばったりである。クラシックマニアには程遠い。マニアになるには、人生は短かすぎる。そんな悠長なことはしていられない。

⑨朝食が終わると、軽く新聞を読み、今日の作業に取り掛かる。ここは山里なので、すべてリモートで処理である。

まずは溜まった事務の片づけ。ネットでの銀行振り込み数件、メールの返事、電話会議の予約、事務用品のオーダーなどなど。その処理に1時間半。

その後は、本業の弁護士業を1時間ほど。緊急の仕事が入るとつい心もざわつくが、今日は特に面倒もなく終了。

⑩午後は著作に2時間。

締め切りの迫った原稿が一段落すると、新作をポツポツ書き始める。著作と思索は、最も充足感を感じるひと時である。

夕方は、付近の雑木林や野の道を散歩して、夕焼け空に生える天城の山並みを遠くに臨んで、心を開放する。

⑪今日はよい日だった。日がな一日陽光が明るく輝き、仕事のストレスもなく、著作も進んだ。

こんな穏やかな日は久しぶりである。何事もなく過ぎた一日に感謝！